

参考 耐震診断結果の見方

建築物の耐震診断とは、震度6強から震度7に達する程度の大規模の地震に対する安全性を評価することをいい、附表の「構造耐力上主要な部分の地震（震度6強から7程度）に対する安全性」欄における評価Ⅲの耐震性能は、現行の建築基準法令における耐震基準（昭和56年6月施行の「新耐震基準※」）と同程度とされています。また、いずれの評価（Ⅰ～Ⅲ）に該当する場合であっても、違法に建築されたものや劣化が放置されたものでない限りは、震度5強程度の中規模地震に対しては損傷が生ずるおそれは少なく、倒壊するおそれはありません。

※新耐震基準：建築物が数十年に一度程度発生する中規模地震（震度5強程度）に対してほとんど損傷しないことの検証に加えて、数百年に一度程度発生する大規模地震（震度6強から7に達する程度）に対して倒壊・崩壊しないことを検証する耐震基準

用語の解説

Is、Gls：建築物の耐震性を表す指標値（構造耐震指標値）

Is/Is0：建築物の構造耐震指標値（Is値）を判定指標値（Is0）と比較し、耐震性を判定した値

Iw：木造に適用される構造耐震指標値

CTU・SD、CT・SD

：主に鉄筋コンクリート造に適用される保有水平耐力に係る指標値

q：主に鉄骨造に適用される保有水平耐力に係る指標値

Z：地域の地震活動度などによる補正係数

G：表層地盤の増幅特性などによる補正係数

U：建物の用途などによる補正係数

Rt：建築物の固有周期および地盤の種別に応じた当該建築物の振動特性により、地震力の値を変化させる係数

S造：鉄骨造

RC造：鉄筋コンクリート造

SRC造：鉄骨鉄筋コンクリート造

No	建築物の名称	建築物の位置	建築物の主たる用途	耐震診断の方法の名称	構造耐力上主要な部分の地震に対する安全性の評価の結果（目標値）※1	耐震改修等の予定		備考
						内容	実施時期	
1	□□□	□□市□□	□□	一般財団法人日本建築防災協会による「既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準」に定める「第2次診断法」及び「第3次診断法」(2001年版)	Is/Is0 = 1.07 (1.00) CTU・SD = 0.75 (0.27)	—	—	Z= 0.9 , G=1.0 , U=1.00 法第5条第3項第1号※2
2	△△△	△△町△△	△△	一般財団法人日本建築防災協会による「既存鉄骨鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準」に定める「第2次診断法」及び「第3次診断法」(2009年版)(鉄骨が非充腹材の場合)	Is/Is0 = 0.82 (1.00) CTU・SD = 0.44 (0.26)	建替え	平成31年4月～平成33年3月	Z= 0.9 , G=1.0 , U=1.00 , Rt= 1.00

附表において、「耐震診断の方法の名称」が同じものを見つけます。

評価の結果と附表による安全性の基準値を比較することで評価（Ⅰ～Ⅲ）が判断できます。なお、評価結果の全てが目標値以上の場合、評価Ⅲとなります。

附表 耐震診断の評価の結果と構造耐力上主要な部分の地震に対する安全性の評価

※下記Ⅰ～Ⅲの安全性の評価は、震度6強から7に達する程度の大規模の地震に対する安全性を示す。いずれの区分に該当する場合であっても、違法に建築されたものや劣化が放置されたものでない限りは震度5強程度の中規模地震に対しては損傷が生ずるおそれは少なく、倒壊するおそれはない。

- Ⅰ 大規模の地震の震動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険性が高い
- Ⅱ 大規模の地震の震動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険性がある
- Ⅲ 大規模の地震の震動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険性が低い

耐震診断の方法の名称	構造耐力上主要な部分の地震(震度6強から7程度)に対する安全性		
	Ⅰ 地震の震動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険性が高い	Ⅱ 地震の震動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険性がある	Ⅲ 地震の震動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険性が低い
一般財団法人日本建築防災協会による「既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準」に定める「第2次診断法」及び「第3次診断法」(2001年版)	Is/Is0 < 0.5 又は CTU・SD < 0.15・Z・G・U	左右以外の場合	1.0 ≤ Is/Is0 かつ 0.3・Z・G・U ≤ CTU・SD
一般財団法人日本建築防災協会による「既存鉄骨鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準」に定める「第2次診断法」及び「第3次診断法」(2009年版)	Is/Is0 < 0.5 又は CTU・SD < 0.14・Z・Rt・G・U	左右以外の場合	1.0 ≤ Is/Is0 かつ 0.28・Z・Rt・G・U ≤ CTU・SD